

「お母さん！本当はサンタさんは、いないんでしょ！私わかったんだから！」
クリスマスなんてとくに過ぎた三月のある日。もうすぐ九歳になる娘は、鼻息も荒く居間にとびこんで来た。いよいよ我が家の娘にも真実を語るべき時が来たか？と思ったが、とりあえず、そう思った理由をきいてみることにした。娘の推理は、こうだった。
「だってね。この間のクリスマスのサンタさんにあげたはずのお菓子が、パパのかばんに入ってるの見たんだもん！」

娘は、鬼の首でも取ったかのようだった。「それです」と前から、なんかおかしいと思ってたの。サインだってへたくそだしさ。
サインというのは、毎年プレゼントと一緒に届く手紙の最後にあるもので、サンタクロースとローマ字で書かれたものだった。

実は、娘は、小学校にあがったころから、サンタの存在を疑い始めていた。それで、夫がサンタのふりをして署名していたのだ。

「だってさ、サニタは外国の人なんでしょ。
じゃあ、もつとウマイはずじゃん！」
ま、たくそのとおりである。私は、もう限界
と思ったが、夫は、
「サニタさんは、何億もの子どもに手紙を書
くんだ。そりあ、疲れて字もへたくそになる
だらうさ。どうだ？」
と、なんとももつともらしい返事をした。する
と娘は、
「うーん、そうかもね。」

意外にあっさり納得したようだった。夫は、
「まだまだ子どもだ。純粹だなあ。」
と娘の素直な反応に、メロメロな様子だった。
後日、夫の留守中に、サニタの話題をそれ
となく娘にふってみた。すると、
「いいもいなくても、ごちでもいいんだ。
サニタいないと言ったら、今度からプレゼン
ト無しかもしれないじゃん。」
さすがに九歳でもすっかり女である。娘は
夫よりも、何枚も上手だった。